

シマの「間」の構造とその復権

菅田正昭

一面に広がるアマ(海)に点在し、時間と空間のマ(間)が象徴的に現れるシマ(島)は、(間)を重視する日本文化の基底を担う存在である。シマがクニを引き寄せたという「島引神話」、現世と彼岸をつなぐ「橋」の事例などから(間)の構造を多角的に考察し、シマの復権に必要な(間)のあり方を考える。

時間と空間の「間」を 詰めるマツリゴト

まずは、前号のおさらいから始めよう。マツリの語源は「マツ(待つ)り」で、その「待つ」は「間ツ」である。そして、古代においては、祭祀権を持った者が「祭り」を行うことがマツリゴト(政)であった。しかし、古代の祭政一致は一種の理想であり、実際のところは「祭」と「政」への分業の契機を最初から孕んでいた。

神の出現をひたぶるに「待つ」のがマツリの本義だが、「祭」はそれで良いかもしれないが、「政」のほうはそうはいかない。性急である必要はないが、やはり時間の短縮が求められる。古代の姫彦制の場合、邪馬台国の卑弥乎とその男弟に象徴されるように、女性の巫女王ハコノミヤが神懸り、男性の審神者が神懸りのとき発せられた神のコトバを判定し、民衆に伝えるのが「政」である。それが時間的に長期化すれば、やはりまずいのである。

祭事が儀式化していくのは、そのためである。神の出現

を「待つ」時間をなるべく短縮させ、期待どおりの結論を導き出せるようにするテクニクが求められるのである。つまり、祭政一致も政治主導の情況に置かれると、祭事の部分は形骸化していきやすい。時間という「間」は、詰められてしまうのである。

もちろん、「待つ」こと自体が「間」を「詰める」ことでもある。それも、時間だけではなく、空間の「間」を詰めることも含まれていた。実は、神は「出現」しているのに、ほんの少し空間がずれていたため、人びとが気がつかないということもありうるわけである。

極左から極右までの、あらゆる傾向のレットルを貼られたフランスの女性神秘思想家のシモーヌ・ヴェーユ（一九〇九～四三）は、『アメリカ・ノートⅡ』の中で、神を、同じ時間に待ち合わせしている恋人に譬えて、神が時間どおり待っているのに出逢えない二人について述べている（註1）。ちなみに、携帯電話がない時代の、ちよつと昔の恋人どうしは、一度や二度、そういう経験を持っているはずである。

「祭」事はその「空間」的な「間」を詰めることでもあった。すなわち、神は我々が居る同一次元の空間に、確実に出現してもらわなければならないのである。前号で触れた「中今」の概念には、時間だけではなく、この同一の空間性も含まれている。

一面に広がるアマ(海)に 点在するシマ

さて、このような「時間」と「空間」の「間」が、最も象徴的に現出している「場」がシマ(島)である。シマのマは、この〈間〉である。それでは、シマのシのほうには、どういう意味があるのであろうか。

これまで、わたしは、シマのシをシボム(萎む・凋む)、シジム(縮む)⇨チヂム、シボル(絞る・搾る)の義で考えしてきた。すなわち、シジム⇨チヂムに典型的に見られるように「①ちぢめる②へらす。弱める。省く」(「広辞苑」)の意である。つまり、シマには〈圧縮された小さな間⇨場所〉という語感がある。

だが、今世紀に入ってから、わたしは、シマのシをシクの語幹のシで考えるようになってきた。このシクには、他動詞五段活用の「敷く・布く」と、自動詞四段活用の「頻く」の二つがあるが、『広辞苑』によれば、前者が「一面に物や力を広げてすみずみまで行きわたらせる意」であり、後者が「動作がしばしばくりかえされる。事が重なって起る」の意である。「雨が降りしきる」というときのシキルは、自動詞シク(頻く)の活用である。要するに、シマのシがシクの語幹シだとすると、シマは〈アマ(海)が一面に広がっている、続けている〉間の中の、とどこどころボ

ツンと存在している場ということになる。

アマのマ(間)は文字どおりの空間の義であると思われるが、アのほうはおそらく強調であろう。すなわち、ぽっかりと広く大きく開いた空間がアマである。このアマから〈天〉と〈海〉が分岐していくわけだが、海の場合は潮水が詰まったところの、ア(間)である。天のアマのように何も無い空洞性の空間とは違うが、フネ(船)のような交通手段を持たないと、このア間はシマをシボませたりシジませたりしてしまう。文字どおり、シマを萎縮させて国地(本土)から離れた島にさせてしまうのである。

国地の神社の中には、二つのアマからシマを経由してやって来たという出自を持つ神々も結構多い。そこでの神祭りは本来、アマ―シマという時空の(間)を詰めて、神々を〈中今〉に顕現させることであつた。あるいは、島へ実際に çık かけて祭りを行った。古代は国家祭祀が行われていた宗像大社の沖津宮の鎮座する『海の正倉院』の異名を持つ沖ノ島や、同じく延喜式内社の「能登国鳳至郡 奥津比咩神社」(註2)が鎮座する石川県輪島市の舳倉島などがある。ここでは、秘儀としての神話の空間と時間が、中今として現出していたはずである。おそらく、〈間〉を詰めた祭りを行っていたはずである。

シマがクニを 引き寄せた(島引神話)

島に住んでいると、隣の島に綱を架けて引つ張りたくなくなる。それは島の面積を拡大したいという野望に発するのでなく、他者と繋がりたいという気持ちから生じてくる。その具体的表現が『出雲国風土記』意宇郡の総説に登場する八束水臣津野命の、いわゆる〈国引神話〉である。

ミヅオミは、出雲国が「初国小さく作らせり」との認識から、周辺のシマの埼々を「国の余り」と見て、そこに杭を打ち、綱を打ち掛けて「霜黒碧くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来回来」とシマジマを引き寄せた。この光景は、もともとは島だつた島根半島が、縄文期の海進・海退の繰り返しによって形成された今日の出雲平野とつながり、さらに弓ヶ浜が長く延びることによって、深く入り込んでいた海が宍道湖と中海へ変貌していく過程を描き出したものとされている。すなわち、本当は〈島引神話〉というべきものなのである。クニがシマを引きたくなるのではなく、シマがクニを引き寄せたくなるのである。

ここには、島と島との〈間〉を詰めた、という古代人の現実的な感情が見事に現われている。実は、島と島とのあいだを、文字どおり埋め立てて「間」をなくしてしまうことは古くから行われていた。たとえば、長崎県北松浦郡

小値賀町の小値賀島や、岡山県岡山市・倉敷市・玉野市にまたがる児島半島がそうである。

『シマダス』には、小値賀島は「もともと2つに分かれていたものが干拓で建武元年（一三三四）に1つの島になった。今でも島の中央部は幅の狭い窪地となっている。…『古事記』の国生み神話に見える「両児島（ふたこのしま）」は、この小値賀島だという説もある」と紹介されている。古代は、かなり流れの速い瀬戸（海峡）によって、分断されていたのである。自由な行き来は〈間〉が阻害していたのである。ちなみに、考古学者の森浩一氏によれば、「小値賀島は、遺跡の宝庫で、五島列島全域で出土している須恵器のうち九五パーセントがこの島に集中しているといわれ、また五島列島で盛土のある古墳の確認されている唯一の島でもある」（註3）という。

児島半島は、『古事記』の「国生み」段の大八島国誕生のあと、最初に生まれた「吉備児嶋」（別名、建日方別）のことである。奈良時代から小規模な干拓が始まり、江戸時代に入ると、岡山藩が新田開発のため、大規模な干拓事業に着手し、元和四（一六一八）年本土側とつながって半島化した。『古事記』によれば、この吉備児嶋と対の関係で誕生しているのが小豆嶋（別名、大野手比賣）である。小豆嶋は今では香川県に属しているが、古代は備前国児嶋郡に属していたのである。幕藩体制の成立による行政区区域の変更と

いう側面もあるが、それ以前に、すでに児嶋（児島）の〈間〉が大きく変化し始めたことが小豆島の文化圏の変遷に及んだといえよう。

現世と彼岸を つなぐ役割としての橋

島の〈間〉を詰める最も現実的な手段は架橋である。この橋を架けるといふ技術は高度な技術であり、離島と離島、離島と本土の架橋はほとんど戦後の出来事である。しかし、ハシ（橋）は〈間〉という概念を考えると、ひじょうに重要なキーワードとなる。

ハシのハは先端という意味のハ（端）である。葉も歯もハ（端）の派生語である。「話す」というコトバも、口のハから「コトノハ（言の葉）」をハナツ（放つ・離つ）の義であり、食事のとき使う箸や、鳥の嘴もこのハシから生じている。いいかえれば、ハとハのあいだが〈間〉である。

すなわち、架橋はこの〈間〉を詰めるための、国家の、あるいは、地方自治体のマツリゴト（政）の顕現である。しかし、ここでは《橋》の意味を考えるため、ある一つの宗教法人が行っている架橋を取り上げたい。それは伊勢神宮の宇治橋である。

この伊勢の宇治橋は、伊勢神宮の内宮（皇大神宮）の参道

口の五十鈴川に架けられていて、〈俗世間〉と〈聖域〓神域〉、すなわち〈ケ(葵) 〓日常〉と〈ハレ(晴れ) 〓非日常〉との境(すなわち「間」である)を結ぶ橋として知られている。明治以降、二〇年に一度の神宮の式年遷宮にあわせて架け替えられたが、昭和二四年の式年遷宮は、日本の敗戦直後ということもあって、時の天皇陛下の英断で無期限延期とされ、四年後の昭和二八年に行われた。しかし、地元の強い要望で、宇治橋だけが当初の昭和二四年に架け替えられ、以後、式年遷宮の四年前に架橋されるのが慣例となった。こうして平成二五(二〇一三)年の「第六二回式年遷宮」に先立ち、昨年(平成二年)一月三日、宇治橋渡始式が斎行された。

よく知られるように、式年遷宮では、二〇年ごとに社殿から神様の御装束・神宝・祭器具の類まで全てを寸分違わず新しく造り替える。このことについて、昭和四〇年代には財界の一部勘違い派から、もっとお金をかけて恒久的な施設を造るべきだとの主張もあった。おそらく「造り替え」を浪費の権化と考えたのであろう。

しかし、式年遷宮には、伝統文化・伝統技術の継承や、檜や杉などの木材を切り出す裏木曾の自然と生態系の維持保全という事柄も含まれていた。さらに、一見、使い捨てに見える古い用材も、古代の「モツタイナイ」思想によって他のモノへと徹底的に使いまわされ、一切の無駄が生じ

ないようなシステムができています。ところが、近代合理精神を持つている連中には、それが見えないのである。

橋は宗教的に見れば、顕界(現世〓写し世、この世、此岸)と幽界(隠り世、あの世、彼岸)をつなぐ役目を持つている。マツリの〈間〉に入っていくための場が〈橋〉なのである。能舞台には「橋掛かり」というものがあるが、そのことは能舞台がまさに神事の場合であったことを物語っている。橋の向こう側へ行くということは、こちら側とは実は、多少なりとも文化圏が違うことを意味していたのである。それは島の場合、特に顕著な傾向だったと思われる。

伊勢の宇治橋の架け替えは無事終了しているが、実は、伝統ということに関してはひじょうに危うい状況にある。宇治橋の場合、宮大工と船大工の技術的連携が必要とされるが、船大工の技術は戦後の和船の衰退で、和船の造船の需要が無くなったことから、船大工そのものの存在が激減してしまっただけからである。後継者がゼロという状況の中で、伝統技術の保持者が高齢化してしまっただけからである。実は、離島の架橋という問題には、和船の衰退にともなう零細漁業者の廃業という側面もあるのである。

マ(間)を覆い、スキマ(透き間・隙間)をつくる日本文化

式年遷宮を考えただけでも、シマとマ(間)の問題が浮

かび上がってくる。内宮（皇大神宮）、外宮（豊受大神宮）に次ぐ三番目の格式を持つ皇大神宮別宮で、三重県志摩市磯部町上之郷に鎮座する志摩国一ノ宮の伊雑宮は、『延喜式』神名帳の「志摩國答志郡 粟嶋坐伊射波宮神社二座（並大）」のことである。この伊勢・伊雑（伊射波）・磯部のイセ・イザワ（イソウ、イサワ）・イソベの語源は、もちろんイソ（磯）に発する。すなわち、陸地と海とのあいだの〈間〉の「イシ（イシ石）」が語根である。ちなみに、志摩から熊野のあたりの海辺では、海に隠れた岩のことをシマという。要するに、伊勢神宮じたいがイソのシマの〈間〉によって成立していることになる。

シマの〈間〉は同時にスキマ（透き間、隙間）のことである。日本文化は単なる「間」ではなく、厳密にいえば、スキマ文化なのである。紙をすく（漉く）・髪の毛をすく（梳く）・田畑をすく（鋤く）の語源は「透く」だが、その意はスキマをつくることである（註4）。すなわち、スクことで空気を取り込むのである。

シマのシをシクと考えると、シクがマ（間）を「覆う」ことであるのたいし、スクのほうはスキマを作ることである。しかし、シクとスクが対立概念かといえは、必ずしもそうではない。シクはスキマを見えなくさせようとすることで、逆に「間」の存在を強くアピールし、一方、スクは「間」を無視して次々と進んでいく、という語感がある。

おそらく、どちらかというと、シクは空間的、スクは時間的なのであろう。

日本文化の 基底を担うシマの〈間〉

ところで、橋は空間に対して架けられるものだが、実際には時間的な効果を狙っている。その意味ではシク―スクの関係は相対的なものである。もちろん、シマの〈間〉を、マツリ（祭り）の中では、詰めたり覆うことはできるが、現実のマツリゴト（政）では不可能だ。埋め立てでもしない限り、シマの〈間〉は、厳然とスキマとして存在しているのである。いうならば、島は日本文化そのものということになるだろう。

伊勢神宮の式年遷宮は元来、国家的事業だが、現在は伊勢神宮という宗教法人とその崇敬者によって行われている。そのため、事業仕分けの対象になることはないが、祭りをすべて無駄遣い・浪費と考える連中からは批判される。もしもマツリ（祭り）が浪費だとすると、構造論的にはマツリゴト（政）も浪費である。そこから、小さな離島に対する公共投資はしばしば批判の大合唱に曝されることになる。しかし、一見「浪費」に見えるものが文化そのものであるということもある。

ポーランド出身の人類学者プロニスワフ・カスペル・マ

リノフスキ（一八八四～一九四二）は『西太平洋の遠洋航海者』（一九二二年）（註5）の中で、パプア・ニューギニアのトロブリアント諸島などの離島間で行われているクラと呼ばれる風習について紹介・分析している。このクラは赤い貝から作る首飾り（ソラヴァ）と白い貝から作る腕輪（ムワリ）の財宝を、前者は時計回りに、後者は反時計回りに、離島間で循環させていく一種の贈答とその返礼にまつわる贈与と互酬ごしゅうの経済的交換である。それを二一〇年かけて行うのである。しかも、そこには儀式的舞踊や祝祭、それにまつわる贈答・祝宴、カヌーの建造や、それに関する複雑な呪術……等々が付随してくる。詳しくはマリノフスキの著書を読んでもらいたいが、このクラの分析から後にカール・ポランニー（正しくはポラーニ・カローイ、一八八六～一九六四）が創始した経済人類学も生まれてくる。

すがたまさあき
菅田正昭



昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本的靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらぼん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。

一見、このクラ交易も、浪費に見えてくる可能性がある。このクラの経済法則は資本主義の原理に反するものであり、マリノフスキも指摘するように、唯物史観とは相容れない価値観から成り立っている。アメリカ・インディアンのポトラッチポトラッチ（註6）のような贈答のインフレーションほどではないかもしれないが、同じような側面もあった。クラの場合、わたしの考えでは、ゆつたりと流れる時間の中で、時間の連続性を途切るのではなく、保ちながらも〈間〉を作ることにあったのではないかと思う。贈与と互酬を行うことで、シマという〈間〉を結び、〈間〉を確認することで、クラという共同体を創造することにあつたのではないか、と思うのである。

日本の離島は合理主義的な人びとからは無駄・浪費の場に見えるかもしれない。スキマに公共投資をしているよう

に見えているのかもしれない。しかし、シマの〈間〉は、日本文化の根源を表わしているのである。日本文化の基底をシマの〈間〉が担っているのである。島が癒しの空間であるのも、ここから発する。島々はシマの〈間〉を維持させ、創造しなければならぬ。

「近代ツーリズムの創始者」(註7)であるイギリスのトマス・クック(一八〇八〜九二)は、明治五(一八七二)年自ら

添乗した初の世界一周旅行の途次、日本に立ち寄り、横浜にも宿泊したが、瀬戸内海の島々の美しさに魅了されたという。その影響で、以後、多くの著名な外国人が日本を訪れるのである。平成二〇年一〇月一日、訪日外国人旅行者の拡大を目指して、国土交通省の外局として観光庁が設置されたが、日本という〈間〉の文化の根源である離島への観光政策が必要不可欠であると思われる。

(註釈)

註1 シモーン・ヴェーユ、富原真弓訳『カイエ4』(みすず書房、一九九二年)一三七ページ。ヴェーユによれば、「神と人間は逢引きの場所をまちがえた恋人たちのよう」な関係にある。ふたりは「四次元界では同一地点」にいるのに決して出逢うことができないのだ。この場合、男のほうが神であり、男は女が立ち去ったあと、その場所で待ち続けるのだ。

註2 本土側の輪島市河井町には式内社の「能登国鳳至郡 邊津比咩神社」及び同「鳳至比古神社」に比定されている重蔵神社が鎮座しているが、この「重蔵」をヘクラと訓むこともできる。もちろん、奥津比咩神と邊津比咩神とは対の関係にある。また、舩倉島の奥津比咩神社の境内(旧社地)からは青銅製の海獣葡萄鏡が出土している。

註3 森浩「古代人の地域認識」(森浩一編『日本の古代2 列島の地域

文化』中央公論社、一九八六年)。森氏の言う「五島列島全域」とは小値賀諸島を含めた古代の「知訶島」のことで、『肥前国風土記』では知訶島は「松浦郡値嘉郷」だが、五島列島は南松浦郡、小値賀島は北松浦郡の地域に入る。

註4 町田誠之『和紙つれづれ草』(平凡社、一九九四年)八一ページ。

註5 泉靖一責任編集『世界の名著59 マリノフスキー レヴィIIストロース』(中央公論社、一九七二年)参照。

註6 『広辞苑』によれば、「北アメリカの北西海岸インディアン」の諸社会で、自己の社会的威信を高めたり称号を獲得したりするために、客を招き、競い合って贈与・消費する饗宴の習俗。ふるまわれた客は、自分の名譽のためにそれ以上の返礼をすることが求められた」とある。

註7 ピアーズ・ブレンドン、石井昭夫訳『トマス・クック物語―近代ツーリズムの創始者』(中央公論社、一九九五年)。